

報



會

會 岳 山 本 日

14

月 四 年 七 和 昭

彦一の思出

浦松佐美太郎

山と人と、此の關係は登山史の進展と共に、その姿を様々に變へて我々の前に現はれて來てゐる。山が未だ神祕の世界であつた初期の時代には、山に食ひ入らうとする人の力は恐ろしい迄に働きかけてゐる。然も数少かつたそれ等の人々の中に、稀に見る人格——山の中で、山に依つて育てられてこそ始めて作り上げられる並外れた人格を見出すのである。

此の頃の山に先達として分け入つて行つた山案内——さうした職業すらも未だなかつたのだが——の中に今でも欲しいと思ふ。出来るならば今一度自分達の身近かに感じたいと思ふ多くの美しいものをあつたこと知つてゐる。

繰返していふ。山と人と此の關係は幾つにも様々に置き變へられて來てゐる。山案内が職業として確立して來た此の頃、私達は悲しい事實の方を多く見せられる様になつて來てゐた。併しこの事も、觀點を變へて眺めれば無理のないことでもあつたらう。山への理解が、そして又登山の技術が非常な勢で進んで來てゐる。此の登山界の一般の趨勢と歩調を合はしてゆけるだけの能力を持つた者を求め様とする時、それは既に無理な註文であつたのかも知れない。殊に山への氣持に於て、登山の態度に於て、之等の要求を満さうとする時、その無理は一層激しいものとなるであらう。

るであらう。

日本の登山界は随分著しい速度で進んで來てゐる。色々のものが、十分な組織を作り上げずに殘されてゐる程にも、その進み方は激しかったのである。此の中から、しつかりした、立派なものを作り出す事が、今日の最も差し迫つた問題でもあつたその意味では、山案内の中の優れた人達は、その数の少いだけに、明日の日本の登山界の爲めに、大事な人達である。

三月二十九日中山彦一が常念の一ノ澤で雪崩に埋められたとの報せを手にした時、何年かの山の季節を、共に暮した私は、深い悲しみの底に押し落されてしまつた。併し私にとつて何よりも口惜しいのは、私達の期待し得る明日の爲めの、大事な一人をむざむざと奪はれてしまつたといふことである。あきらめ切れない口惜しさである。

心から山が好きだつた男、之が中山を云ひ表はす一番いふ言葉かも知れない。そして人との關係に於てはあんなにも多くの人に可愛がられた男も珍らしかつたであらう。

山を心から思ふまゝに味はふとする者にとつて、中山はほんとうにいい伴侶であつた。少しの心配氣もなく何のこたわりもなく、思ふまゝに山を連れて歩けた。

山と一緒に歩きながら、一緒にゐることを強ひて意識させない伴侶、これこそ私達にとつて何よりの山の伴侶である。私は中山と一緒に歩き

ながら、少しも氣兼ねをする必要もなかつた。山の惡場を氣の向くまゝに歩ける、大事な山友達であつた。

中山の死の報せを前にして、過去に樂しみ得た之等の記憶が一層大事なものと、心の中に蘇つて來る。山に於ける人と人との關係は随分難しいものである。山に於ては、人はその個性を出来るだけ我儘に働かすうとする丈けに、山友達の選擇は随分と難しいものになる。殊に金銭の關係の入る山案内を、その伴侶としやうとする時、その煩はしさは一層増して來る。此の點でも中山は、それらの事を一切忘れて、共に山を歩ける仲間であつた。

山への情熱、私が常々山へ登る者にとつて何よりも大事なものだと思つてゐる此の氣持の上に於ても、中山は強く深いものを持つてゐた。山を歩きながら、山を語りながら、つひ引き入れられて、私は東京へ歸る日を延ばしてしまつた事も屢々であつた。

山の植物の名前を覚え様とする努力だけでも、見てゐて氣持のいい程であつた。何圓かする中山にとつては随分高價な、植物圖鑑を漸く手に入れた時の嬉しさうな顔が今も思ひ出される。

山の道具を大切にすることを心掛け、此處に書き加へて置き度いと思ふことのひとつである。雨の中を歩いた翌の日、すつかり忘れてしまつた私のビッケルに、赤く錆が浮いてゐたのに、中山のビッケルが、朝の日の光

にきらりと光つてゐたのを横目で眺めて、すつかり閉口したことがあつた。

色々な意味で、中山は生れながらの山男であつた。私の記憶に間違ひがなければ、小槍に一番最初に登つた男だつたと思ふ。小槍の登攀に就ては随分色々な登路を開いてゐる。岩の上では少しも危げがなかつた。自然に育ち上つて來たあの技術を、私は尊いものだと思つて眺めて來た。そしてその態度には、驚く程大膽な所があつた。

それにも拘らず、人の中に出て來ると大變な耻しがりやでもあつた。人との話にあんなに氣を使つた男も少いであらう。

あんなに氣のいい、山の好きな男が、山の爲めにその命を奪はれてしまつたのだ。山の持つ、意地の悪い程の強さが今更の様に疼々と感じられる。

一緒に幾年かを掛けて登らうと約束してゐた山も幾つか數へられる。併しそれも今となつては、夢の様に果敢なく破れてしまつた。

眞白に輝く後立の山々、早春の有明村が淋しくぼつんと心に浮んで來る。

中山の氣持は、谷を押して落ちてゆく水の様に素直だつた。お花畑の花の様な可愛らしさがあつた。そしてあの笑聲は、山の上に擴がる青空の様に朗かであつた。今でも何處かそこから耳に聞こえて來さうに思へてならない。



日本山岳志の編輯印

刷の時に困つた談

二月四日の理事會の席上で、會報の第一頁の原稿執筆の振り當ての時

に、私に日本山岳志編輯苦心談を書けとの事で有りまして、同じ六日付の御手紙で、其旨の御通知を受けましたので、其後に十日餘りも色々と記憶を辿つても見ましたが、更に苦心などを致しました覚えが有りませんので有りまして、たゞ其時分に有りましては、山岳記載を主と致しました。書籍や地圖が殆んど見當りませんでしたので有りまして、全く困りました。この事は只今でも記憶に存して居りますが、コレは山岳志の巻頭に私も書きまして、小島岳兄も書いて置かれましたのに、約一世も経過を致しました今日に、それを繰り返へしますものも愚のやうにも存じますから、私の國の宅の文庫に保存を致して置きます、既往五十年間の手紙や書類の整理を致さうと存じて居りますから、其際に注意を致して居りまして、若しか萬一に苦心など致しましたやうな材料を見を致しましたならば、其時に改め

まして執筆をする事に致します。實際上山岳志は私が見當り次第に書き抜いて置きました手記と、手當り次第に集めて持つて居ました詩文集や地誌書や名勝記などの記事を整理排列を致して見ましたにさへ過ぎませんので有りまして、別に苦心などを致します譯も、道理も無い筈で有りまして、編輯の折りに迷つて困りました事が一ツと、印刷に着手を致しましてから困りました事が二ツとで、合計でコノ三件で有りました。

第一の編輯の時に迷ひましたのは漢詩文や和歌俳句など、殊に漢詩の題の何々山と有りするものは、普通の山岳を指しましたものか、又は寺院を呼びましたものと云ふ迷ひが出来まして、容易に判断を下す事が出来ませんので有りまして。一例を申しますと、金龍山淺草寺と有りすれば、東京淺草の觀音様を指しました事が明瞭致しますが、單に金龍山と有る題になりますと、山岳が寺院かと迷つて來ました。それが淺草の觀音様位に著名のもの計りで有りすれば、如何に私が低能で有りまして、迷ひも困りも致しませんでしたでせうが、其當時の私は旅行も漫遊も碌に致して居りませんのでして、其方面の見聞が至つて狭まかつたので、大略は地圖を見まして、平坦地や都市附近に見えまして何々山は、多分に小丘の上に在る寺院だと見當を著けて臆断を下しまして、山地の寺院となりまして、山

漢詩の絶や律やでは、文句を讀んで見まして、山やら寺やら明瞭を缺きますものが可なり有りまして、其時には山が寺かを知りまして、他の傍證が必用になつて來まして、折角に見付出した詩歌俳句などを直に其山岳條下に引用を致しまするだけの識見も勇氣も有りませんので、毎度に傍證を得やうと焦心を致しました。其後には寺院専門の大冊の書籍も出版になりましたが、まだそんな本が有りませんでしたので全く寺と山の區別に惑ひました。次に印刷に着手を致しましてから

山岳原稿締切日

山岳第二十七年二號の原稿は、來る五月末日を以て締切りと致します。

會員諸氏の御執筆御寄稿を切に希望しましたお願ひ申上げる次第であります。

編輯係 敬白

困りましたのは、田中阿歌麿子爵の所へ、巻頭に載せまする寫眞を拜借に行きました時に、子爵から福島縣統計書の山岳部を示されましたので、私は始めて各府縣の統計書に山岳部に達頂里程と云ふのが掲載をされて居ります事を知りましたので私はコレを根據に致しまして、多数の山岳の増補が出来ます事と非常に欣びまして、早速に友人の援助を請ひまして、上野の圖書館に通ひまして、達頂里程の全部を寫して來ま

して、小島兄から頂戴を致しました増補の記文を主と致しまして、志賀先生や其他に諸方から求めて参りました材料と諸地圖を並べまして、本文の校正に追はれながらに執筆を致して居りました。時が酷暑の盛夏で有りしましたのに、私は二階の障子を閉ち切つて居ますので、汗が流れて眼の中に這入りまして、病眼が痛みまして、誠に困り果てました。障子を閉きますと、風が来て涼しくて良いものでは有りますが、その代りに絶えずに地圖や書類を吹き飛ばしたり、本の頁を吹き捲くりまして、應接の煩に耐へませす、殆んど落ち付いて執筆が出来ませんので、已を得ませすに、暑いのを辛棒我慢を致しまして、二階に閉ち籠つて居ました譯で有りまして。

最後に困りましたのは、題字の揮毫が出来なかつた事で有りまして。私が最初に小川琢治先生から山岳火山帯の區劃をお願ひを致しました時に、山岳志出版のお咄しを致しますと、先生は地圖や書籍の借覽も出來るし、専門諸大家の知いともなれて、諸事に便宜を得られやうと云ふので、東京地學協會の會員になれと勧告を致されましたので、私は入會を致しまして、先生の御紹介で諸大家の御知己を得まして、地學協會は勿論の事、地質調査所や震災豫防調査會などへ出入する事になりました。其時の地學協會の會長が子爵榎本武揚閣下で有りしましたので、地學協會の當時の役員方が是非に題字を閣下

に願ひと云ふので、地學協會の總會の時に、田中子爵や、巨智部、神保、坪井、大森などの諸博士が依頼をして呉られましたので、閣下は即座に快諾を致されまして、明日に見本を持つて宅までお出でと云はれましたから、翌日に向島のお邸へ伺ひまして、床に掛けて有りまして、張瑞圖の書幅が私が稱賛を致しましたのが因となりまして、其後も随分と珍品の拜觀の光榮を得ました。だが併し閣下は毎度に快諾を與へて置きながら、まだ氣が進まぬとか、意に満つた句を得ぬとか云ふので、十度許も足を勞しましたが、私を譽めたりオダテたりして居られて、更に揮毫を致して下されませんので有りまして。

山岳志で困りました事は以上で盡きましたので有りまして、雜誌の原稿が無くなりまして困り切りしましたので、その窮餘に私が本邦の古書の記紀や古語拾遺や風土記の逸文なんかの中から、山岳記事を書き抜きまして、山岳史料の蒐集に着手を致しても見ました事も有りしましたが、私の一身上の都合で有りまして中止を致しました。以後は雜誌の原稿が不足を致しまするやうな事は、斷じて有りませうと確信を致して居りますから、時代遅れの私などが、古書の書き抜きなんかを致します用は、勿論は無い事で有りますと存じて居ります。

昭和七年二月十七日、五十六才、凡叟、高頭仁兵衛、謹明しるす。



會務報告

四月七日定例理事會報告

出席 評議員一名 理事十名

委任三名

一、「山岳」廿七年一號の印刷部數定價等を決定したり。

一、會報バックナンバーを請求せらるる向あるも將來或る號數に達したるとき合本頒布する豫定なれば今後請求に應ぜざることに決定。

一、本會山小屋建設地として穂高潤澤を選定。建設理由、設計圖、經營方針、地圖等を添付せる借地願を四月一日松本營林署宛發送したり。

一、關西より特に出席せられたる中原理事より最近の遺難事件に關し詳細なる報告ありたり。

一、本年度山日記につき協議せり。

山岳第二十七年 第一號豫告

本欄

清水峠及三國峠に關する歴史的考察

小島 一祐

朝日岳と北又谷

塚本 繁松

新高東山の登攀

鹿野 忠雄

小槍の登路に就て

高橋榮一郎

雜錄

ダーヂリン小景

三田 幸夫

バルトへの旅

田口 一郎

九重山靈雜記

竹内 亮

九州山地の地形を現はす言葉二三

竹内 亮

岩菅山と苗場山

細野 重雄

木曾駒ヶ岳の二つの澤

黒田 正夫

高山の登攀と酸素吸入 八代 準

新設山小屋紹介、遭難報告、新刊圖書紹介、山岳總索引、其他

頁數 約三百頁

定價 二圓五十錢

發行 四月末日

會員計報

三谷慶三氏(昭和三年九月入會、會員番號一〇八二號)は去る三月廿二日信州檜澤大槍小屋に於て遭難逝去せらる。本會はこの若き有爲なる會員の死に深き哀悼の意を表するものなり。三月二十八日施行せられたる葬儀には本會理事中原繁之助氏列席し弔詞を呈せり。

神戸市在住能登定吉氏(會員番號一二九號、明治四拾年八月入會)は昭和七年二月二十七日附訃報に接せり、謹而茲に哀悼の意を表す。

初春の會員有志晩餐會記事

先日葉書を以て御通知申し上げました。初春の有志晩餐會は三月十八日午後七時より神田小川町の大常盤に於て賑やかに開催されました。春とは云ひ未だ薄寒を覺える夜には相應しい料理に舌鼓を打ち久し振りに集つた古老連や又昔の懐かしい山仲間達の思ひ／＼の自慢や手柄話に花を咲かせる等ほんたうに愉快な集りであつた。何時もそうではあるが、とすると若い連中は先輩連の元氣に押され勝ちであるが、次回からは一つ若連中も大いに意氣を示めして貰ひたい。斯くして盛會裡に閉會したのは午後九時半過ぎだつた。尙塚本繁松氏より酒の寄贈あり、御好意を深謝す。當夜の來會者は、

星野光之助、飯塚篤之助、伊藤朝太郎、小嶋久太、近藤茂吉、松井幹雄、岡整徳之助、多賀富藏、高野實藏、

高頭仁兵衛、塚本繁松、山田多市、吉田竹志、木村鑑吉、松本善二、大熊保夫の十六氏。尙ほ次回の世話人は星野光之助、飯塚篤之助、岡整徳之助の三氏にお願いした。

(大熊保夫)

調査部報告

山岳總索引

第一年より第二十五年迄の山岳目次の總索引は約一ヶ年を要したが最近に到り完了した。内容は本欄雜錄附録を地方別及び筆者別とした二種で菊版六號活字にて約百頁に及ぶ事と思ふ。山岳廿七年一號の附録として發行と決定した。

全國登山團體調査

昨春秋より各方面に依頼して調査してゐたものである。六百通以上も問合書を發送したのであつたが、回答の來たのは三百五十團體位のものである。解散、合同、新生と色々に登山の團體にも動きのある事は當然であらうが、その激しさにはいさゝか驚いてゐる。將來、より以上嚴密に調査したならば其の數は更に増す事であらう。現在蒐集した資料を以て印刷する事になつたが、編輯の都合にて五月下旬發行の山日記に收録する。發表の内容は名稱、所在地、代表者氏名、創立年度、會員數、機關紙の名稱及其發行回数。

山日記編輯經過

會が山日記の編輯に着手してから第三年を迎へる事になつた。年毎に

改版して内容の改善、充實に努めてゐる事は勿論である。一九三二年度の山日記は昨年以上に色々と項目を増加してゐる。発行は五月下旬の豫定である。定價は壹圓、會員には昨年と同じく二割引にて頒つ事になつてゐる。詳細は會報次號に發表するが、一人でも多くの會員が新しい山日記を山へ携行されん事をお願ひする。

お願ひ

三月常会で遭難した塚田清治、中山彦一、高橋益司をはじめ本年一月病死した信濃大町の勝野玉作等、年々良案内者の姿を消してゆくことは山岳界にとつては非常に寂しい事である。今度本會圖書室にアルバムを備へ、物故した良案内者の寫眞を収めて置く事となつた。會員諸氏の中に物故した良案内者の寫眞を御持ちの方は是非とも事務所宛御寄贈に預り度い。案内者氏名、撮影場所年月日、寄贈者住所氏名を御書添の上御送附あらん事を希望する。

(角田)

新着圖書

學士會月報 第五二七號
日本登高會々報 第五一七號
東京登山深流會々報 第三一四號
神戸ヒヨコ登山會報 第百一十一號
神戸アヌモ會々報 第二一三號
廣島山岳會々報 昭和七年三月號
ルックサック俱樂部々報 第六輯
白樺旅行會 第八年二號

田川山岳會誌 第一號

大阪ルックサック俱樂部々報第四號
東京市役所體育會山岳部

パンフレット第一號

奈良みなかみ會々報第一五一七號
三角點 第十輯 ファガス・クラブ

旅 第十二年三月號

東京アルカウ會

山 第三年三、四月號 横濱山岳會

管見録 第八年二、三號 大阪管見社

臺灣山岳彙報 七年二、三月號 臺灣山岳會

アルカウ趣味 第十九年三、四號

日本アルカウ會

ベテスツリヤン第一三七一一三八號

關西徒歩會

山行案内 七年三、四月號

昭和マウント俱樂部

岳友 七年二、四月號

日本岳友會

務の旅 第十三年第三十八號

務の旅會

山の旅 第二十六號 山の旅會

旅行 第七十三號 東京旅行クラブ

山彦 第五年四號 東京山彦山岳會

日本游泳聯盟要錄 日本游泳聯盟

山小屋 第五號 朋文堂

登山とスキー 第七號

アルビニズム社

山の旅 第一一〇號 J.C.C.社

飛騨史壇 第十一卷一號 飛騨史談會

ツリースト二十周年記念號

ジャバンツリースト・ニロー

Svenska Fjällblommor av Torsten

Lagerberg 1931.

Zeitschrift des Deutschen und

Osterreichischen Alpenvereins

1931.

Bulletin Appalachian mountain

club VOL. XXV No. 5-6, Feb-

mar. 1932.

Trail Timberline No. 160-161.

Feb-mar. 1932.

The Prairie Club Bulletin No.

213-214, Feb-mar. 1932.

Akademischer Alpenclub Bern

26. Jahresbericht VOM 1. NOV.

1930. Bis 31 Okt 1931.

Revue Alpin VOL. 32 No. 4

trimestre 1931.

The Mountaineer VOL. XXIV No.

4, march 1932.

Butletti del Centre Excursionista

de Catalunya ANYXLII gener

DE 1932. Num 440.

VII-No.2 Feb 1932.

Die Alpen VIII-No.3 Mar 1932.

The Geographical Journal VOL.

LXXIX No.2 Feb. 1931.

La montagne C. A. F. No. 237.

Feb 1932.

Cms Alpini Italiani Rivista me-

nsile No. 12, Dec. 1931.

nsile No. 1, Jan 1932.

Vizione Ligure Escursionisti

Rassegna mensile

Anno 19°-N. 1. Gennais 1932.

Anno X.

Anno 19°-N. 2. Febrairs 1932.

Anno X.

Bulletin du Club Alpin Belge

No. 25. Dec. 1931.

購入圖書

三好學、牧野富太郎著

日本高山植物圖誌二冊明治四〇年版

Walter Amstutz: Der Schnee-

Hase. 1931.

寄贈圖書

小島烏水著 銀河 明治三三年版

坂戸、清水共著 日本山岳文獻ノ一

以上清水忠雄氏

Succession in the Vegetation of

mt. Fuji By Dr. Bunzo Hayata

1929.

以上松方三郎氏

Arnold Lunn- The Harrovians

1913.

Harry De Windt- From Paris to

New York By Land. 1903.

Public schools Alpine Sports Club

year book 1922.

Das Berner Oberland im Lichte

der deutschen Dichtung 1923.

Henry Hoek- Wege und Wegege-

nossen 1920.

Schneelauf Ausbildung 1920.

Berglänge 1922.

Hoch Land 1920.

Skilauf Anleitung und Ratschläge

für Anfänger

Lilienfelder Oder Norweger Ski-

lauftechnik. 1911.

Das Totenkirchl 1911.

Drandsatz Für Die Markierung

Von Skiweigen 1914.

Kleiner Ratgeber für die neuere

Alpine Literatur 1923.

Die Hölle in sport Wissenschaft

und Kunst. 1922.

新聞・雜誌・スクラップ 一括

以上豐邊國臣氏

箱根(歴史地理臨時號)明・四三・版

山河跋渉號(武俠世界夏期増刊)

大・七・版

みづゑ(山岳號) 大・六・版

旅の友(文藝俱樂部増刊)明・廿一・版

伊豆半島(歴史地理増刊)大・二・版

漫遊の友(新小説増刊)明・廿二・版

横井春野 富士と足柄大・二・版

尾崎紅葉 煙霞療養明・三七・版

野中至 富士案内明・三四・同

志村烏嶺 高山植物採集及培養法

明・四二・成美堂

志賀重昂 地理講話

明・廿九・早大出版部

地震 第四卷第三號

以上木村鑑吉氏

圖書基金に就てのお願い

本會の圖書基金が昨年度に於て四

十五名五十九口の御申込を得ました

ことは本會特に圖書係の深く感謝す

る所であります。

右の圖書基金を以てからぬ和洋

山岳圖書を購入し、各國山岳會誌及

び本邦諸登山團體の會報を合本整理

することが出来たのであります。

然しながら圖書室の内容を充實せ

しむるにはまだ多くの費用と時

間と努力とを必要とします。本會の

圖書室を勉くとも本邦に於いて最も

完備せる山岳圖書館たらしむるため

此の上とも會員諸氏の御後援をお願

ひ致したいと思ひます。

從來圖書基金の御出捐を願つてゐました方々へは別に書状を差上げることに致しますが、この会報上を以て尙篤志の會員諸氏に圖書基金の御出捐をお願い致す次第であります。

昭和七年四月 圖書係

(松方・伊藤)

追而御申込の形式は左の通りであります。

日本山岳會圖書基金申込書

一、昭和七年度圖書基金何口何圓也

(但し一口年額金五圓)

右申込候 貴 名

日本山岳會御中

御申込書丈け先きに頂戴して後日御拂込み下さつても結構です。

五月中國書室夜間開室日當番

二日 渡邊 十八日 松本
四日 藤島 二十日 田中
六日 茨木 廿三日 鳥山
九日 伊藤 廿五日 角田
十一日 神谷 廿七日 浦松
十三日 横 三十日 渡邊
十六日 松方

右の外毎週火木土の三日間と第一第三の日曜日は午後一時より午後五時まで開室しております。

山岳バックナンパー委託販賣

本會圖書室に於て販賣してゐる山岳バックナンパーは、今度會員諸氏の御便宜の爲、神田區神保町の巖松堂書店に於ても販賣致す事となりました。但し販賣は從來發表の通りであります。



圖書紹介

新刊書

Himalaya, Karakoram and Eastern Turkestan. by Filippo de Filippi. London, Arnold. n.t. 50/-

去年の秋から噂をきいて今がかと待ち焦がれてゐた本書も愈々この四月中には確實に出版される。

内容はいまだ之を詳らかにしないが前著ウエスタン・ヒマラーヤ以後の數次の遠征の記録紀行が英譯されてゐるものとすれば参考資料としても讀物としても充分期待をかける書物であらう。

本文中挿入圖版三百圓、色刷地圖四枚、色刷挿繪二枚、パノラマ寫眞十五枚、大さは Crown 4to. くらい書いたゞけて近來にない大著である。日本へはいつ頃届く? 五月中に來れば陰鬱な梅雨ときを明るくしてくれるだらうし、夏になつて届けば都會の苦熱を忘れさせてくれるだらう。と先づお知らせせかたゞ提灯なもつておく。(ふぢしゅ)

會報編込用表紙頒賣

會報も大分號數を重ねました。遅ればせ乍ら綴込用表紙を作ります。ヒラは濃綠色レザー、背は濃紺色クロス、會章を押す。體裁頗る優美會報の紛失を防ぎ保存に便利です。代金は送料共四十錢。郵券代用で結構ですがなるべく三錢及び二錢の切手で願ひます。御申込は芝區琴平町一不二屋ビル日本山岳會宛に願ひます。 會報係

陸地測量部新刊地圖目錄

五萬分一地形圖 修正
蘆 澳 六 號 プタ社 一面
五萬分一地形圖 修正
日 光 七 號 川 治 一面
同 野 一 號 追 貝 一面
長 府 一 號 中 之 條 一面
甲 岡 一 號 三 峯 一面
靜 岡 一 號 靜 岡 一面
德 島 一 號 高 松 一面
同 十五號 志 度 一面
岡山及丸龜 四號 池 田 一面
同 七 號 仁 尾 一面
大 分 四 號 古 江 一面
二萬五千分一地形圖 修正
佐倉近傍 十四號 千葉東郡 一面
宇都宮近傍 十五號 宇都宮西部 一面
東京近傍 十一號 東京西部 一面
甲府近傍 六 號 甲斐吉田 一面
(昭和七年三月三十日)

山の消息

會員動靜

○會員小笠原勇八氏は三月上旬越後土樽より法政大學ヒュッテに至り快晴に恵まれ仙ノ倉山に登頂せられたり。
○會員鈴木勇、舟田三郎兩氏は三月下旬越後側より仙ノ倉登山を試みられたり。
○會員松方三郎、伊藤秀五郎、櫻井信雄の三氏は三月二十一日吉田口五合目より富士山に登頂されたり
○會員伊藤秀五郎氏は三月中旬信州熊ノ湯附近に遊び遊峠を草津に越えられたり。
○會員黒田正夫、長澤佳熊兩氏は三月二十一日苗場嶽大ヒュッテより苗場山に登山を試みられたり。
○會員塚本治氏氏は三月中旬信州小谷温泉より雨飾山、天狗原等へ登らんとせられたるも連日の吹雪にて断念、乙見山峠笹ヶ峯を経て歸京せられたり。
○會員書上喜太郎氏は四月上旬出發約一ヶ年半の豫定にて獨逸に留學せらるゝ由。
○武田久吉、山口成一兩氏は三月二十七日より四月二日まで峨々温泉にスキーを試みられたり。悪天候のため登山の機なかりし由。

卷機山・牛ヶ岳

三月十八日 上越線中里より山越へ清水部落に至る。雪深く十三時間余を要したり。

十九日 午前九時出發、卷機山頂午後四時、牛ヶ岳まで十分。六時半歸着。上越の山岳みな見えたり。
二十日 春に珍らしき吹雪、滞在。
二十一日 清水峠を上州に越えんとせしも天候思はしからず引返せり。
卷機山はスキー登山に好適の山也同行田中菅雄氏。(藤島敏男)

三月の薬師より

小生等先月十九日芦峯より登山致し二十二日スゴ小屋二十五日スゴ乗越小屋を使用し二十六日薬師岳に往復しました。乗越小屋は全部埋りて見當らず極めて特徴有小屋前の白樺によりてそれと判明しました。それより五色ヶ原、平小屋に到り四月一日漸く大町に出するを得ました。二週間のうち晴天は僅かに二日間三月の天候としては珍らしき事と思ひます。平小屋日電出張所のラジオによりて常念岳に於ける塚田中山兩君の遭難を知り山旅を共にしたる事も有ることとて大變氣の毒に思ひました。(島田武時)

臺灣便り

臺灣在住會員有志は三月十日横濱恒氏の渡臺を機として臺北市表町中惣にて談話會を開催せり。出席者沼井鐵太郎、青木繁、大橋捨三郎、齊藤三男、保坂清次郎、山口嘉七、木田文治、池田雄之進、井上一男、出羽佐一、平澤龜一郎、高尾勝夫、田榮藏、金光、横有恒の諸氏。
臺灣山岳會は最近社団法人設立許可ありたる由。

最近の山の遭難概報

一、一行三谷慶三氏寶積誠二氏。

三月十七日上高地泊。十八日一ノ俣泊。十九日槍の肩にて荒天の爲引返

し殺生小屋泊。蒲團あり、焚火す、

兩人とも疲勞甚し。二十日大槍小屋

に至り泊、荒天、食糧少し。二十一

日滞在、荒天。廿二日好晴。三谷氏

小屋を出てスキーを穿きたるも足動

かず。午前七時半寶積誠身にて出發

十一時半一ノ俣。横尾君小屋の高

生に人夫を派し救援を求む。午後六

時三十分早大生も共に出發。又暴風

雪となる。午後十一時半大槍小屋着

三谷氏一尺程埋まり既に絶命。直ち

に上高地へ引返す。

二、一行成定喜仕治氏金光準人氏案

内塚田清治。

三月十二日五千尺泊。十三日一ノ俣

泊。十四日槍へ出發。十五日殺生小

屋泊。十六日下山。十七日一ノ

俣滞在。十八日午前四時穂高へ出發。

穂高小屋泊。十九日一ノ俣歸着。二

十日午前八時常念へ出發。午前十時

頃より雪降り始む。二十一日吹雪二

十二日晴。二十三日吹雪。二十五日

神戸驛助役及人夫捜査に出發。二十

七日午後三時常念小屋にて五六枚

の蒲團の下に人事不省の成定氏を発

見、手當を加ふ。小屋の東南約百五

十米を距る所に他の二氏の絶命せる

を発見せり。

附記、常念一ノ澤に於ける山野三

郎氏案内中山彦一高橋益司の遭難に

つきては尙確報に接せず。前記の遭

難と共に詳報を得次第發表すべし。

研究欄

山岳寫眞

山岳寫眞に就ては嘗て「山岳」誌

上に高野實藏、加藤精一の兩氏が夫

々貴重なる研究記事を發表されて以來

外にその寄稿を見ないのである。最

近に於ける寫眞術の長足の進歩發達

に就ては敢てここに述ぶる必要はない

のであつて會員中にでも科學的に

或は實地に於て研鑽を遂げられて

「山岳」誌上にも其等見事な寫眞が多

數掲載されて居る故今更私のやうな

未熟の者が之に關して寄稿するが如

きは甚だ僭越な次第と思ふが聊かな

りとも御參考の資となり撮影の一助

とならば筆者の幸甚とする所である

抑々寫眞は物理と化學とを巧みに

結合した特殊の科學であるから、何

人でも正當な手續に由つて行へば凡

ての操作も敢て不可能なことでもな

いが未熟者は兎角無理をして失敗す

ることが多いのである。

登山の樂みの一として我々の山旅

中に於て印象深くさせた景色とか危

険を冒した仲間の動靜等の眞相を残

させて追想出来るものにはスケッチ

により或は紀行文による等種々の方

法もあるが、寫眞術も亦山岳地方に

於ける想出を日新し、且つ正確に

維持させる一助となるものである

而して山岳寫眞では山登りといふ事

が主要な目的であつて、寫眞術は之

から派生する謂はゞ從的方面に過ぎ

ぬものであるから苟も登山家の主情

の追求を妨げるやうなものであつて

はならぬと思ふものである。それ故

に登山用カメラは迅速にして且つ無

駄の時間を要することなしに對稱物

を撮影することの出来るやうな簡單

なものでなければならぬ。換言すれ

ば簡單で小型の取扱のよい大さで輕

いカメラを使用するのが宜しいと思

ふのである。山岳寫眞に關する書物

中には良結果は組立器械と乾板使用

のみにより得らるゝやうに述べられ

てあるが、現今の状態に於ては最早

この時代は過ぎたと思ふのである。

最初にカメラは如何なるものを選

擇すべきかといふに之はサイズの大

きさにより支配されるのである。原

書に接する場合に余り小型のもので

はデイトールや調子など兎角看過さ

れ易いのである。私は最初グエスト

型を使用し居たが擴大鏡を用ふる

が又又は引伸によつてのみその味が現

れるやうに思はれるので少くともア

ロニー型以上の大きさのものが宜し

く、大型手札(×××××)なれば原

書のまゝで鑑賞することも出来又自

由な大きさにまで引伸することも可

である。この型なれば使用法も簡便

であり、重量も重くなく且つ型も大

きくないから標準型として適當と思

はれるのである。次に乾板、フィル

ム、バックの中何れを使用するの

が宜しいかと云ふに私は種々の點から

フィルムバック使用が取扱上優れて

居ると思ふのである。而してバック

容器は輕金屬の二重蓋にて製し其中

に防濕劑アドソールを入れて置けば

十分である。レンズは寫眞術成功の

主要秘訣の鍵をなす一であらう。

私は Georx Dagmar 1:4.5, Zeiss

Testar 1:4.5, Zeiss Double-Protar

1:7.5 等を使用したことがあるが

就中最後のレンズは鮮明の優秀なる

ものとして最も適當に居るものと

信ずるものである。然し Dagor 1:

6.8 レンズは前記諸レンズと比較し

て敢て遜色なきものとして推挙すべ

きものである。

カメラが最上の材料で作られ、完

全な職人によつて製造されればなら

ぬことはいふまでもない事である。

ここに於て以上の諸點から登山用と

して最も評判もよく適當した最上の

カメラは Ideal No. 225, Double-

Protar Camera であらうと思ふの

である。

扱實際撮影の場合に於ても山岳寫

眞は一種の記録的寫眞であるから立

體は立體らしくあつて平面的に出し

たのでは物足りなく感じる。然し構

圖や採光の如何により氣分を現はし

た藝術的價值ある寫眞をとる事が出

来る。然しながら山岳を主題とした

ものでも溪流、岩壁、奔瀉、瀑布、

森林等のやうな部分的撮影に於ては

夫々に應じて差違があるから其等の

特徴とデイトールを十分に現はすこ

とに注意することをするのである

構圖は各人の趣味により異なるので

あるが、之は寫眞術以外に山の核心

を掴むことが肝要で山の氣分を現は

すことが必要である。空の多過ぎる

こと、人物の多いこと、地平線が中

心に過ぎること、前景のないこと、

最高峰から凡ての山を見下ろす等の

寫眞は面白味の少ないものと思ふ故

最初の中は是等の點につき注意すべ

きであると思ふ。亦正確な露出を予

知することは困難な事であるが、大

體の研究は露出計によつて知ること

が出来ることが是等は經驗によつて自

得するより外に方法がないのであつて

平常から使用するカメラの性能を會

得し且つ出發前に凡ての點に就き故

障なきやう細心の注意を拂ふことが

肝要である。私は前記 Ideal No. 225

Zeiss Double-Protar 1:7.2 f=29

cm. に Agfa film Pack を使用し夏

季晴天の標準は日本アルプス地方に

於ては大體 1/50 秒、絞り f=11-16

秋季紅葉の季節に於ては絞りは大體

に於て變化なく露出は 1/60 秒位、

冬季雪景撮影の場合には 1/60 秒、絞

り f=11-16 で大なる差違を感じて

居らぬのである。

歸宅後現像から焼付までの操作に

就て信頼すべき營業者あれば萬事之

に依頼して可なりと信ず。現像は種

々あるも沒食酸現像液を用ひてタン

ク現像にて處理するときは好結果を

得らるゝやうである。

焼付は勿論原板の良否如何による

ものであるがガラス板に陽畫焼付を

行へば印畫紙の夫と比較しデイトー

ルと深味とを十分にだし、氣分に

於て格段の優秀さを現はすものであ

る。

一九三二、三、岩永 信雄

ゾーム式の海豹皮に就て

十勝岳の麓で知合の連中が自らゾーム會社のマネキンボーイと云ひながらゾームの海豹皮をはつたスキーで種々の特長を見せて呉れたのが縁で新し物好きの私は歸京後片桐商店で残り物の和製品を買つて了つた。その後いろいろ使用法を教へられて近頃ではどうにか甚便利な皮と云ふ確信を得るやうになつた。

處が二月の會報研究欄に浦松氏の一文を拜見して同好の士が又一人ふえたやうな氣がして甚心丈夫に思つた。しかし浦松氏の所説中二三勝に落ちない點もあり、また私の考へてゐたことと異なる點もあるので茲に自分の経験を聊か書いてみよう。

先づゾーム式海豹皮に就て第一の缺點と云はれる「途中で何かの拍子で剥れた場合」には私の経験（雪は零下九度位の新雪）では丈夫な麻紐でしつかりスキーに縛つて一時を糊塗り（檜枝岐小屋から尾瀬長蔵小屋まで）別に不便を感じなかつた。此の時はずと戸外でゾーム皮（海豹皮の略）を張つて見る爲めに懷爐を皮にまいてルックザツクの中に入れて行つたが降雪中でよく張れなかつたのである。又時には畫紙を用意して行つてそれで張りつけても一時は凌げる。

第二の「濕つた雪上を歩いて皮が濡れそれが凍つてはがれた場合」此の時は一吋面倒だが私のすくなくない経験では甚だ稀な場合としか考へられ

ない。元來シートボから再び皮を張つて登るやうな時は皮をはがして一度しまつて置くのが本當ではあるまいか。もと／＼ゾーム皮を持つ人は何時でもバラとメタを携行しなければならぬと考へると此の場合には再び張り直すより仕方がないと思ふ。（勿論寒い所では仲々の難事業ではあるが）それにすこし位剥れたのならバラを靜かにスキーの上を往復させて手早やく部分部分張つて行けばどうにか張れる。

最後にゾームワックスの事だが、赤は滑降用、黄、青、緑の三種類は夫々温度による皮張りつけ用且普通の登行用のワックスたる事は御承知の通りであるが、黄レツテルは暖い時の貼付に適してゐるが寒くなるとぢきに皮が剥離する處がある。零下十度以下の場合には青、緑がよくないが、或るゾーム皮の経験家ではいつも冬山に登つて居る人の話では常に緑のワックスを極く薄く塗つて置けば殆んどはがれる處無くよく貼付けられるしどうせバラを持参して居る以上皮を取つた時にバラで強く焼いて置けば非常に滑降面を得られるから非常にいゝさうである。それで私の経験からもワックスは黄色のみを推奨されるのは或は春のスキー登山にはと云ふ字が脱けて居るのではないかと思はれる。

結局私の考へでは、ゾーム皮をつけて他の皮の人と一緒に登ると兎角早く歩いたり、エツチがよくきくと云ふ事で樂をするので、若し剥れた

りすると一寸悪い立場に立たされることは感じないでもないが、兩方を使つて見れば軍配はゾーム皮に揚がるやうに思ふ。一概に日歸り以外の山の旅にゾームは不當とは言へないやうである。

雜然と思ひついたことを書き並べたが、何かの参考になれば幸ひである。

附記 ゾーム皮の使用法に就ては私ももつと知りたいと思ひます。いゝ御考があつたらどなたでも御教へ下さい。
（黒田鎮夫）

編輯後記

この冬は山の不幸事が夥しく、大いに喜んで居つた矢先、常念岳に於ける遭難事件につゞいて、之を救援に赴く途中不幸、雪崩のため壓死した悲慘な出来事、尙ほ之と殆んど日を同ふして大槍小屋附近で凍死された會員三谷氏の訃報を手にして、暫し茫然たらざるを得ない。

將來を矚目されてゐた若い登山家と、多くの登山家から寶物のように敬愛されてゐた良き山案内人の死を憶ふ時、そこに我々として何かしら大きな責任といふようなものを感じないでは居られない。

（神谷 恭）

昭和七年四月廿三日印刷
昭和七年四月廿五日發行

編輯兼編輯

角田 吉夫

發行所

東京市芝罘區本町一
日本山岳會
會報編輯所

（印刷印堂明）

山岳關係圖書販賣目錄

吉田 東伍編	大日本地名辭書	全五冊	五〇〇
日本山岳會編	山岳 自一 卷	美裝合本	九〇〇
佐藤傳藏共著	大日本地誌 全廿六卷	全廿六冊	五〇〇
山崎直方共著	日本地理風俗大系全十九冊	全十九冊	三〇〇
新光 社版	不二山 改訂版	一冊	一八〇
小島 鳥水著	日本風景論	一冊	七〇
志賀 重昂著	湖沼の研究	四〇〇	
田中阿歌麿著	日本山嶽志	四〇〇	
高頭 式著	山行	六〇〇	
横 有恒著	山行	六〇〇	
志村 烏嶺著	浮世繪と風景畫	六〇〇	
小島 鳥水著	富士山大觀	二八〇	
志村前田共著	地形學	二〇〇	
辻村 太郎著	地層學	四〇〇	
今井半次郎著	日本高山植物圖譜	全二冊	三〇〇
三好牧野共著	高山植物實物標本	全二冊	七〇〇
上野 政吉編	日本地理大系 別卷山岳編	二〇〇	
改造 社版	地質學雜誌 自三十七卷	三〇〇	
帝大 室編	地質學雜誌 自三十七卷	三〇〇	
教	當切の際は暫く御猶豫願ひます		
△當記載品は一部分です他に多數持合せて居ります			
△各大學專門學校登山團體の年報及會誌は次の會報に記載致します			
△山岳バックナンバの一手販賣をさせて頂くやうになりました陸續御用命願ひます			
△參謀本部 陸地測量部圖幅も取扱ひ致して居ります			
△古書御拂下の際は是非巖松堂へ御用命下さい			

東京市神田區中猿樂町

巖松堂書店古典部

古典部專用電話九段33二二六二番
振替東京六五五六番

Dent (C. T.) ; Mountaineering (The Badminton Library of Sports and Pastimes.) London, 1914. ¥ 1.80
Fitz Gerald (E. A.) ; Climbs in the New Zealand Alps. London, 1896. ¥ 15.00
Weston (W.) ; The Playground of the Far East. London, 1918. ¥ 10.00

Lunn (A.) ; The Mountains of Youth. London, 1925. ¥ 2.20
Smythe (F. S.) ; The Kangchenjunga Adventure. London, 1930. ¥ 6.00
Bauer (P.) ; Im Kampf um den Himalaya. München, 1931. ¥ 3.00

理學博士

武田久吉 共編 (豫約募集)

理學士

田邊和雄

高山植物寫真圖聚

卷貳第

高山植物圖聚に就て

白井光太郎

體裁

第貳巻頒布規定

菊二倍判一面刷・用紙アリトポスト貳百枚

解説菊判上質紙約百五十頁

貳拾枚宛(解説付)毎月發行

頒布拾回を以て完了

一時拂金貳拾圓(送料共)

分劃拂金貳圓(送料十四錢)

分類索引、和名索引を第十回配本に同包

一時拂會員、分劃拂會員にして御希望の方へは

實費金貳圓にて頒つ

昭和七年四月參拾日

豫約締切後の御申込に對しては定價にて頒つ

一時拂 金貳拾五圓

(送料共)

分劃拂 金貳圓五十錢

(送料十四錢)

完了後は第一巻と同様實價參拾圓

梓書房

東京市神田區北甲賀町四番地
振替東京七八六四四番
電話神田二七七五番

高山山頂の植物は疾風積雪に耐へ、假寒勁強奇狀を呈する者多く、其草花は概して強大の根株を有し、其花或は清楚或は麗にして、山麓に於ける凡庸花の比儔に非ず。武田、田邊兩氏は植物學專攻の學士にして、特に高山植物を愛好せらる。且健の質高山植物探究の資格に於て缺くる所なし。而して愛好の切なる所生地に於て之を撮影して之を行囊に收め、下界に廣くして、同好研究の資料に供し、且又一般塵界の大衆に示して、山上別に樂土あるを知らしめんとせらる。萬學慨世の士と謂ふべきなり。高山植物圖聚第一集成る。受けて之を見るに編次の體裁首に植物所在の山容を寫出し、次で所生の草木に及ぶ。先づ其大態を得たるを喜ぶ。而して所載植物の撰擇亦宜を得て、疑似を決し涇渭を分つに力ある學に忠なるの志を見るべし。且同種の植物に就き其開花の狀と結實の狀とを並出するもの多し。之四時を通じて幾度か登山し之を觀察撮影するに非ざれば能はざる所にして、其用意の周到なる、其勞苦の多大なる尋常研究家の企及し能はざる所なり。予は曾て明治二十年より三十年に至る約十年間内地の高山峻嶺を跋渉し植物探檢に従事せる經驗あり、高山植物探檢の容易の業に非ざるを知る。而して此圖聚に於ては研究の態度に絲毫餘裕あり、種類の撰擇亦其宜を得其解説亦要領を得て分布の詳細に及ぶ、科學的の刊行物として間然する所なきを覺ゆ。所載の植物悉く高山の奇品にして、心目を娛ましめ知識を増進する事尠少なからず。就中やうじんの異品と列舉し、其區別を明辯せる如き、奇種鳳凰沙參を掲出せるしにれにんじんみやまにんじんを並記せる等、其用意の親切學術に忠なるの志を見る可く、就て學ぶ事の多きを喜ぶなり。豫め斯の如き刊行物を健全なる過程を経て續々發刊せらるる事を希望して止まざる者にして、之を世に推奨するを樂しむものなり。

(内容見本進呈)

ルツクサツクと登山具は片桐へ!!

キシリンク型	¥ 7.50 — ¥ 10.00
スキー型	¥ 8.50 — ¥ 12.00
スキー用小型	¥ 2.50 — ¥ 3.50
ウインドヤシケ	¥ 5.00
羽根入シュラフサツク	¥ 24.00
シール	¥ 2.50 — ¥ 6.00
ゾームシール	¥ 7.00

☐スウイスからピツケル・ザイル・アイゼン入荷致しました。何卒御用命下さいませ。

片桐テント登山具店

神田區今川小路二ノ四(今川小路電車停留所前)